「家族と地元を
守り続けていきたい」
その想いが私の農業を後押ししています。

農業に懸ける情熱

1 就農したきっかけ

農家の長男として生まれたので、小学生の頃からいつかは自分も農家を継ぐのかなと思っていました。短期大学を卒業後、13年間、暗渠工事の会社に務めていましたが、「家族と地元農業を守りたい」という気持ちが大きくなり、33歳で就農しました。

2 仕事をしていて嬉しかったこと

試行錯誤を重ねて改良した土で作物が思うように成長してくれたことです。所有しているほ場が粘土質により作物が育たず苦労した時期がありました。ほかの生産者に負けないようにこの土壌をどうにか改善しようと、土づくりについての講習会に何度も足を運びました。

大豆の栽培を始めた頃は反当2俵程度しか収穫できませんでしたが、有機物を活用した土壌改善に取り組んだことで、令和5年度は管内でトップの収量を得ることができました。理想の作物が育つまで8年間掛かりましたが、諦めないで取り組んだことで良い結果に結びつきました。

3 これから挑戦してみたいこと

管内の農業者と取り組んでいる稲ホールクロップサイレージ（WCS）事業に力を入れていきたいです。昨年3月に水田活用の直接支払交付金の支給要件が変更したことをきっかけに管内農業者26戸が集まり、WCSの生産組織を設立しました。現在は白老町の畜産業者と耕畜連携を進めています。我々農業者は家畜のエサとなるWCSを提供し、畜産業者は管内では手に入らない牛ふん製のペレット堆肥を農業者に供給する循環型農業の確立を目指しています。ペレット堆肥を地域農業者へ供給することで、岩見沢農業の活性化につなげていきたいと考えています。

4 後継者不足解消に向けた想い

私は地元の金子町が大好きで、地元を守り続けていきたいと強く思っています。しかし、少子高齢化により子どもの数が減少していることに加え、職業を豊富に選ぶことができるこの時代に「つらい、汚い」といった印象が強い農家を目指す子どもは極めて少ないと思います。

そこで、少しでも子どもたちに農家に生まれたメリットを感じてもらうために、子どもたちを集めて年中問わず納屋で焼肉をしたり、冬は雪の積もったほ場でスノーモービルに乗ってもらったりと、農家ならではの体験をしてもらっています。農家に憧れを抱く子どもたちが増え、金子町の後継者不足問題の解決につなげていきたいです。

人物 memo

岩見沢市金子町
舩造　大作 さん（40歳）

妻のよしみさんと父の淳一さん、母の祐子さんの4人で約73ヘクタールの農地に水稲や小麦、大豆、子実コーンを栽培。農家の長男として育ち、小学生の頃から農家を継ぐことを決意。